



第119回日本精神神経学会学術総会の現地開催が昨日(6月24日)終わったばかりで、その余韻に浸りつつこの文をしたためています。2日目の懇親会で、すでに参加者数が9,000人を超えて過去最多となったと聞いて驚きました。新型コロナウイルス感染症が5類に移行して人数制限などもなくなり、全国から精神科医が集って幅広いテーマについて議論のできるこの学術総会に現地参加することをそれだけ多くの人たちが楽しみにしていたということなのでしょう。筆者も3日間、さまざまな発表を聞いたり、シンポジストや司会として登壇したり、先輩方、元同僚など懐かしい方々と再会したり、夜のみなとみらいで親しい仲間たちと飲み交わしたりと、この学会ならではの楽しみを存分に味わって、最終日には高揚した気持ちで帰ってきました。

現在の精神医学、精神科医療に関するテーマを網羅する本学術総会の膨大なプログラムのなかから、何を選んで感想を書いたらいいのか迷うところですが、今回は「受賞報告会」のこを取り上げたいと思います。この報告会は例年学術総会第2日目にメインホールで開かれており、精神医学奨励賞、精神医療奨励賞、フォリア賞の授賞式と講演、国際学会発表賞、若手国際シンポジウム発表賞、そして今年からはPCN Reports 最優秀論文賞の授賞式が行われました。さらに、PCNと、今年からはPCN Reportsの査読者のなかから、特に貢献度の高かったreviewerの方々にawardsが授与されました。

私は精神医学奨励賞・精神医療奨励賞委員会の委員長として、昨年から受賞報告会に出席しています。この2つの賞とフォリア賞を受賞した論文や活動に関する報告は大変有意義な内容なのですが、授賞式ということであまり会員の関心を引かないのか、フロアに聴衆が少ないことを大変

残念に思っています。精神医学奨励賞は精神医学の発展のため顕著な業績を上げた若手(40歳未満)の研究者を表彰する賞、フォリア賞はPCNの掲載論文のなかから選ばれた優秀論文に授与される賞なので、受賞者による報告では現代精神医学の最先端の研究について知ることが出来ます。一臨床医の筆者は基礎研究の講演に対して敷居が高いと感じてしまうのが常なのですが、さすが優秀な皆様だけあって、そのような者にも理解できる、わかりやすい明快なプレゼンテーションでした。また、質疑のときに語られた研究の苦労話も興味深く、こういう話を聞くことができました。10月10日のオンデマンド配信終了までに、ぜひ多くの会員の方に受賞者の報告を視聴していただけたらと思います。

今年は精神医療奨励賞には応募がなかったのですが、昨年は2団体が受賞し、その地道な活動実績に関する講演を聞いて感銘を覚えたことを今も記憶しています。ささやかであっても、地域に根ざした患者さんファーストの精神科医療の実践を積み重ねている方々はたくさんいらっしゃると思います。今年の秋の募集の際には、精神医療奨励賞にも多くの推薦がなされることを願っています。

日本語での査読で四苦八苦している筆者には、英語論文の査読者のご苦労は想像するにあまりあります。皆様の並々ならぬご貢献に対して、学会がreviewer awardsという形で労うのはすばらしいことだと思います。和文、英文いずれの学会誌も、投稿者の皆様の粘り強い努力と「この論文をさらによいものにして掲載したい」という査読者の熱い思いによって作られているということ、あらためて感じた授賞式でした。

田口寿子